

往生をねがうしるし 世をいとうしるし—親鸞聖人の教えと非戦非核の願いに聞く—」全戦没者追弔法会記念講演 (2011.4.16 東本願寺)

## 「戦争の世紀を超えて」

東京大学大学院教授 姜尚中氏

原子力は、核は、人を殺すけれども、同時に平和に利用するならば、電力の供給源として我々の豊かな生活を守ってくれる。そして、科学技術は我々の想像するような事故に対しても、万全の備えをしているはずだ、という幻想を抱いているのではないでしょうか。

私の勤めている大学においても、学者も、原子力エネルギーや原子力工学について高度な知識を持ち、そして現在のメディアの中に様々な言説を流しておられます。しかし、その知識は人間の傲慢なのです。本日の表白の中に「煩惱の闇」という言葉がありました。人間の知性、人間の自我が作り出した科学技術、こういうものによってすべてを賄うことができない、その謙虚な姿勢が欠けておりました。この原子力エネルギーを利用する制度は、民間の企業、国、大学、様々な地域社会に生きている人々をすべて巻き込んだ巨大な一つのシステムです。そのシステムの中に一人ひとりが歯車として巻き込まれ、そして我々もまたその電気之恩恵に預かってまいりました。しかし、それがまさしく制御不可能なものに変化し、そして将来において、東日本を大惨事に導くかもしれないという瀬戸際に、今の日本が立っているわけです。二十世紀において、広島と長崎では、科学技術が人を殺戮するということの酷さ、我々の想像を絶することが起きるということを示しました。翻っていきますと、私も訪れたことのあるポーランドのアウシュビッツで、数十万とも数百万とも言われているユダヤ人が虐殺されました。

そのガス室を設計した人物は、ルドルフ・ヘスという人です。この人物は優れた科学的設計ができた人物であり、一日あたりどのようなエネルギーを費やして、どうすれば効率的にたくさんのユダヤ人を消滅させられるかを設計いたしました。この人物は敬虔なクリスチャンでした。そして、家庭においてはよき夫であり、息子、娘に対してもよき父親でございました。私たちが、日常の平

和な世界の中で出会う、本当に普通のよき社会人でした。しかし、その人物は、まさしく身の毛もよだつような殺戮の設計者でございました。

先ほどの表白に「煩惱の闇」とありました。これはまさしく、科学技術を作り出し、それを最先端のものを競い合う人々の中に、科学や技術が、場合によっては遺伝子工学のように、人間の遺伝子、ころまでも、自由自在にコントロールできるのではないかと、私たちが考えたと傲慢としか思えないようなものが中に閉じ込められていたのかもしれない。広島、長崎に原爆が落とされたとき聞いた時、アインシュタインはただ一言、「オー、ウエー(ああ悲しい)」と言ったということ覚えております。言葉にならなかった。アインシュタインは、恐らくその本質を見抜いていたと思うんです。

こう考えますと、我々は科学技術というものをどう考えるべきなのか。この科学技術が先端的になればなるほど、広島、長崎のように、飛行機の上から、ボタン一つで爆弾を投下する人間は、恐らくは相手の敵の顔が目の前で見えるような白兵戦とは違う、何万、何十万の人間を殺しているという意識すらもないのではないかと思われます。あたかも朝起きて、コーヒーを一杯飲んで、これから出撃し、そして午後には戻って来る。家に帰れば自分の妻が待つっており、子どもは歓声を上げながら自分を迎えてくれる。しかし、そのパイロットは、わずか数時間の飛行機の中で、広島と長崎にボタン一つで、あのよう爆弾を投下し、一つの業務として、私たちの日常の、ありふれたサラリーマンの業務として原爆投下を行ったのではないかと思えます。このルドルフ・ヘスも、税理士が毎日の物品の数を数えるように、人間の死の数を業務として数えているのではないかと思えます。

これは、二十世紀、そして今を生きている我々にとって、ある意味において科学技術が、人間の温かさや人間が持っている実感を、ますますそぎ落とすという側面があるということを我々に示しています。核に対してこれはどの楽観的な考え方が、なぜこの戦後六十年の日本社会に蔓延していたのか。そのことは、科学立国、技術立国、そしてもの作りにおいて、世界に冠たる日本というもの、それが繁栄の基礎であり、それは戦争の時代とはまったく違った平和な

時代であるという考え方にあると思います。戦前と戦後の大きな違いはそこにございました。

しかし、戦前、また戦後も同じ科学技術は、その本性においては、変わっておりません。そして、なおかつ戦前の電力、今で言う原子力、鉄道、通信施設、そして「鉄は国家なり」と言われるような鉄や様々な硬度の合金、これは明らかに、戦前において最も重要な戦争を遂行するための国家のインフラであり、そしてそのために必要な

石炭やマグネシウムあるいは様々な戦略的物資、現在で言えばプルトニウムやウランというものが、国家の存続にとって死活的な意味を持つというように戦前も言われておりました。そして現在においても、石油やプルトニウムやウランの安全な確保ということが、国家の存続にとって最も重要だと言われております。現に、戦前の日本の総力戦体制は、電力の国有化から始まりました。当時の革新官僚、後に内閣総理大臣となる岸信介に代表されるような、革新官僚が革新軍部と一緒に

になり、政党政治の疲弊の中で国民の喝采を浴びて国家の運営に指導的な役割を果たしました。現在の日本も、政党政治に倦み、そして、政党政治に様々な失望が広がっております。もちろん、歴史は簡単に繰り返すわけではございません。日本には平和憲法があり、人々は平和ということの大切さを、誰よりも認識していると思います。

しかし、今回のような原子力、電力、エルギーというものが、どれほど私たちの社会の根幹にあつて、それが実は国家の戦略的な物資といわば密接不可分の関係にあり、それが同時に民間の企業と国家あるいは大学や様々なシンクタンクが一緒になった、ある種の聖域と化していたということも我々に明らかになりました。私は、熊本で生まれ、育ちましたが、水俣からは、かなり離れたところにおりました。水俣病を引き起こしたチツソは、かつて現在の北朝鮮に巨大な水力発電所を持ち、そして化学肥料を生産していた、ある意味においては、戦前の最も重要な財閥の一つでもございました。考えてみますと、今回、低濃度の汚染水を海水として排出



するとということが行われました。不知火海が有機水銀によってどれほど汚染され、その結果として、私たちの想像を絶するような有機水銀中毒による神経疾患により、この世のものとも思えない痛ましい状況になったということも、我々はつい最近の出来事として知っているはずです。私は放射能による汚染水を海へ排水することを、なぜいとも簡単に、仕方のないこととして認めたのかということに対して、強い憤りと釈然としないものを感じました。

水俣病は戦後最大の、まさしくある意味においては、自然に対する冒瀆であり、またある意味においては、最大の人災でございました。そして、その補償のために数十年の歳月が流れました。直接の因果関係を確かめるために、何十年も裁判を行い、認定を受けられなままに多くの被害者は途中においてこの世から亡くなっていききました。果たして、東京電力が第二のチツソになるのか私にはわかりません。しかし、そのような直近の歴史というものを社会が記憶として受け止めていかなければ、このような海水への汚染水の放出ということに対して、もつと違った声が出てきたのではないかと思います。

### 身の丈で生きるということ

科学技術への楽観主義は同時に、過去の記憶、過去に対する眼差しをもてない、あるいは過去を振り返ることが、私たちの習性としてできなくなってきたのではないかと思います。新聞もテレビも水俣病について言及する記事は、私の知る限りにおいては一行もございませんでした。私は仕方なく、ある新聞の中に、石牟礼道子さんが書いた『苦界浄土』、まさしくそういうものにならないようにと書きました。この楽観主義は、私たちにまさしく「煩惱の闇」に目を背けるといような事態をもたらしてきたのです。今も、人種的な差別や、民族的な違い、宗教的な違いによって人を人とも思わないような殺戮が地球上の至るところで続いております。日本は、そのような時代から決別し、

一九四五年から平和憲法の下に平和な社会を作ろうと、まさしく灰燈と帰した社会からこれほど豊かな社会を作り上げました。

世界が驚き、世界が羨むような豊かな社会になりました。しかし、その社会の中で、私たちが唯一価値と思えるようなものは何であったかと言うと、安楽に、そして自らの欲望を満たす、その自分の欲望を満たされる社会が最も幸せな社会だという考えです。難しく言えば、ある種の現世ご利益主義というものが、私たちの生き方の根本に座るようになりました。快を求め、不快を避ける。見たくないものには目を背ける。見たいものだけ見る。欲望を満たしてくれることが幸福であり、そうでないものは一切自分たちの視界から消えていく。ある種のそういう社会になったのではないかと思います。したがって、原子力を、そのような豊かさを、便利さを、そして、自らの欲望を達成してくれる最も便利な文明の利器になったのではないかと思います。

かつてバブル経済の時に、東京の地下を歩いても煌々と電灯が付き、東京の中心地は不夜城のように色鮮やかなイルミネーションが、お互いを競うような時代がございました。今回も震災の前は、相変わらず東京は二十四時間光り輝いておりました。ニューヨークに行っても、パリに行っても、ロンドンに行っても、ソウルに行っても、地下鉄の中に入れば、東京ほど明るいような所は、恐らく世界中探してもどこにもなかったと思います。今、東京を歩けば、節電、停電のために非常に暗い状況になっております。それを批判する人もいます。しかし私はこれで元に戻ったのではないかと思っています。これまで「身の丈で生きること」を私たちが忘れていたのではないかと。自分の身の丈で生きる。快を求め、不快を避けることだけが幸福ではない。敢えて言えば、人は幸福を求めるにしても、その幸福は結果であって、私たちはどうあればより人間的な生活かできるのか、どうあれば人と人とが苦楽を共にすることができるのか。今、人口に檜災(かいしち)している言葉を使えば、人と人との絆(きずな)ということでございます。

さようなら原発1000万人アクション六万人集会よりメッセージ  
東京明治公園 2011.9.19

大江健三郎さん(呼びかけ人)

二つの文書を引いてお話しします。第一は、私の先生の渡辺一夫さんの文書です。「『狂気』なしでは偉大な事業はなしとげられない」と申す人々もおられます。それは、『うそ』だと思えます。「『狂気』によってなされた事業は、必ず荒廃と犠牲を伴います。真に偉大な事業は、『狂気』に捕らえられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって、地道になされるものです」。

この文書はいま、次のように読み直されうるでしょう。

「原発の電気エネルギーなしでは、偉大な事業は成し遂げられないと申す人々もおられます。それは『うそ』だと思えます。原子力によるエネルギーは、必ず荒廃と犠牲を伴います」。

私が引用します第二の文書は、新聞に載っていたものであります。原子力計画をやめていたイタリヤが、それを再開するかどうか国民投票を行いました。反対が九割を占めました。それに対して、日本の自民党の幹事長が、こう語ったそうです。

「あれだけ大きな事故があったので、集団ヒステリー状態になるのは心情として分かる」。

偉そうなことを言うものです。もともとイタリヤで原子力計画が一旦、停止したのは、二五年前のことです。チェルノブイリ事故がきっかけでした。それから長く考え続けられた上で再開するかどうかを、国民投票で決めることになったのです。その段階で、福島事故が起ったのです。

いまの自民党幹事長の談話の締めくくりはこうです。

「原発というのは簡単だが、生活をどうするのかということに立ち返った時、国民投票で九割が原発反対だから、やめましょう」という簡単な問題で



はない」と幹事長は言ったのです。

原発の事故が、簡単な問題であるはずはありません。福島放射線物質で汚染された広大な面積の土地を、どのように剥ぎとるか、どう始末するのか、既に内部被ばくしている大きい数の子どもたちの健康をどう管理するのか。

いまはつきりしていることは、こうです。イタリアではもう決して、人間の命が原発によって奪われることはない。しかし私たち日本人は、これからもさらに原発の事故を恐れなければならないということです。私たちは、それに抵抗する意思を持っている。その意思を、想像力を持たない政党の幹部や、経団連の実力者たちに思い知らせる必要があります。

そのために、私たちに何ができるのか。私たちには、この民主主義の集会、市民のデモしかないのです。しっかりとやりましょう。

武藤類子(ハイロアクション福島原発四〇年実行委員会)さん

福島の皆さん。どうぞ一緒に立ち上がってください。(会場から拍手。皆さん立ち上がる)

皆さん、こんにちは。福島から参りました。今日は、福島県内から、それから、避難先から、何台も

バスを連ねて、沢山の仲間と一緒にやってきました。初めて、集会やデモに参加する人も沢山います。それでも、福島原発で起きた悲しみを伝えよう、私達こそが、「原発いらない」の声をあげようと、声を掛け合い、誘いあつてやってきました。(拍手)

初めに、申し上げたいことがあります。3.11からの、大変な毎日を、命を守るために、あらゆることに取り組んできたみなさん、一人ひとりを、深く尊敬いたします。それから、福島県民に、あたたかい手を差し伸べ、つながり、様々な支援をしてくださった方々に、お礼を申し上げます。ありがとうございます。(拍手)

そして、この事故によって、大きな荷物を背負わせることになってしまった、子どもたち、若い人々に、このような現実を作ってしまった世代として心から謝りたいと思います。本当にごめんなさい。

さて、みなさん、福島はとても美しい所です。東に紺碧の太平洋を望む浜通り、桃・梨・リンゴと、果物の宝庫の中通り、猪苗代湖と磐梯山の周りに黄金色の稲穂が垂れる会津平野。その向こうを深い山々が縁取っています。山は青く、水は清らかな、私たちのふるさとです。

3.11、原発事故を境に、その風景に、目には見えない放射能が降り注ぎ、私たちは被曝者となりました。

大混乱の中で、私たちには様々なことが起こりました。

すばやく張り巡らされた安全キャンペーンと、不安のはざままで引き裂かれていく人と人とのつながり。地域で、職場で、学校で、家庭の中で、どれだけの人が、悩み、悲しんだことでしょう。毎日毎日、いやおうなく迫られる決断。逃げる、逃げない。食べる、食べない。子どもにマスクをさせる、させない。洗濯物を外に干す、干さない。畑を耕す、耕さない。何かに物申す、黙る。様々な苦渋の選択がありました。

そして今、半年という月日の中で、次第に鮮明になつてきたことは、「事実隠されるのだ」「国は国民を守らないのだ」「事故は未だに終わらないのだ」「福島県民は、核の実験材料にされるのだ」「莫大な放射能のゴミは残るのだ」「大きな犠牲の上でなお、原発を推進しようとする勢力があるのだ」「私たちは捨てられたのだ」

私たちは、疲れと、やりきれない悲しみに深いため息をつきます。



でも、口をついてくる言葉は、

「私たちを、馬鹿にするな」「私たちの命を奪うな」です。

福島県民は、今、怒りと悲しみの中から、静かに立ち上がっています。子どもたちを守ろうと、母親が、父親が、おじいちゃんがおばあちゃん。自分達の未来を奪われまいと、若い世代が。大量の被曝に曝されながら事故処理に携わる原発従事者を助けようと、労働者達が。土地を汚された絶望の中から農民が。放射能による新たな差別と分断を生むまいと障害を持った人々が。一人ひとりの市民が、国と東電の責任を問い続けています。そして原発はもういらないと声を上げています。

(「いらぬぞー」の声)

私たちは、静かに怒りを燃やす、東北の鬼です。私たち福島県民は、故郷を離れる者も、福島の土地にとどまり生きるものも、苦悩と責任と希望を分かち合い、支え合って生きていこうと思っています。

私たちと、つながってください。私たちがおこなっているアクションに注目してください。政府交渉、疎開、裁判、避難、雇用、除染、測定、原発・放射能についての学び、そして、どこにでもかけ、福島を語ります。今日は、遠くニューヨークでスピーチをしている仲間もいます。思いつく限りのあらゆることに取り組んでいます。私たちを助けてください。どうか、福島を忘れないでください。もう一つ、お話したいことがあります。それは、私たち自身の生き方、暮らし方です。私たちは、何気なく差し込むコンセントの向こう側を想像しなければなりません。便利さや発展が、差別と犠牲の上に成り立っていることに、思いを馳せなければなりません。原発は、その向こうにあるのです。

人類は、地球に生きる、ただ一種類の生き物にすぎません。自らの種族の

未来を奪う生き物が他にいるのでしょうか。

私は、この地球という美しい星と、調和した、まっとうな生き物として生きたいです。ささやかでも、エネルギーを大事に使い、工夫に満ちた、豊かで創造的な暮らしを紡いでいきたいです。

どうしたら、原発と対極にある新しい世界をつくっていけるのか、誰にも明確な答えは分かりません。

できることは、誰かが決めたことに従うのではなく、一人ひとりが、本当に本当に本気で自分の頭で考え、確かに目を見開き、自分ができることを決断し、行動をすることだと思つたのです。

一人ひとりに、その力があることを思い出し、しよう。私たちは、誰でも変わる勇気を持っています。奪われてきた自信を取り戻しましょう。

原発をなお進めようとする力が、垂直にそびえる壁ならば、限りなく横に広がり、つながり続けていくことが、私たちの力です。

たつた今、隣にいる人と、そつと手をつないでみてください。見つめ合い、お互いの辛さを聞き合いましよう。涙と、怒りを許し合いましよう。今つないでいる、その手のぬくもりを、日本中に、世界中に広げていきましょう。

私たち一人ひとりの背負っていかねばならない荷物が、途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目をそらさずに支え合い、軽やかに、朗らかに生き延びていきましょう。

ありがとうございました。

\*この集会に参加し、スピーチを聞き胸打たれました。6万人が明治公園に入りきれず駅までの道を埋め尽くすその中心に福島の人たち。その怒りと悲しみから燃え広がった火のように、数えきれない人々が東京の街にあふれ出しました。(惟)

